

学校の危機に対する安全対応手順、活動、および訓練について

一般社団法人 日本防災教育訓練センター 代表理事 サニー カミヤ

学校が行う危機対応訓練は、生徒の発達と認識レベルに焦点を合わせ、且つ、教師や職員などの役割や認識レベルも考慮に入れなければならない。ここにおける認識レベルは、一般的なガイダンスとして使われるものであり、保育園児、幼稚園児、小学生、中学生、高校生など、個人の認識と対応能力は、それぞれ個々に違うことを前提としている。

危機管理マニュアル作成時において、大切と思われることは、「個々人が学校における危険をどのように認識し理解しているか？」という知識/理解度を分析すること。また、「個々人が学校における危険にどのように対応し行動することができるか？」という発達段階における能力を具体的に評価することで、「学校における安全性の適切な説明、手順、活動、および/または訓練について」、発達に見合った安全性の説明/活動を段階的に訓練メニューなどをつくることができると思われる。

この資料の引用元（アメリカの学校教育局の安全&予防対策）は下記の通り。

- ↓ Best Practice Considerations for Schools in Active Shooter and Other Armed Assailant Drills

[http://www.nasponline.org/Documents/Research and Policy/Advocacy Resources/BP_Armed_Assailant_Drills.pdf](http://www.nasponline.org/Documents/Research%20and%20Policy/Advocacy%20Resources/BP_Armed_Assailant_Drills.pdf)

- ↓ Drills and Exercises: Guidelines for Schools - CMS -

ARIZONA DEPARTMENT OF EDUCATION SCHOOL SAFETY AND PREVENTION JUNE 2015

<https://cms.azed.gov/home/GetDocumentFile?id=595519a53217e10f0055e46a>

		個々人が学校における危険をどのように認識し理解しているか	個々人が学校における危険にどのように対応し行動することができるか	学校における安全性の適切な説明、手順、活動、および/または訓練について
認識レベル	発達段階	知識/理解度	発達段階における能力	発達に見合った安全性の説明/活動
初期レベル	プレスクール 幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> 「危険」という事に対して基本的な理解を示す。 何が危険であるか、危険ではないかを判断するには大人の指導を必要とする。 潜在性のある危険と実際に起こる危険を区別することが難しく、現実と空想との区別をすることが難しい。 理解できる言葉 <ul style="list-style-type: none"> 「ゲットアウト—逃げる」または避難する 「ハイドアウト—隠れる」または電気を消して姿が見えないようにする 「キープアウト—侵入を防ぐ」 (例：大人が教室のドアに鍵をかけ保護し、危険を避けて児童の安全を確保) 	<ul style="list-style-type: none"> 緊急時に大人の管理と指示に従う。 基本的な安全指示に従うことができる。(例えば、「ゲットアウト」または避難、「ハイドアウト」、または消灯して外に出るなど) 	<ul style="list-style-type: none"> 学校にいる大人は学校が安全であるように努めている、ということを説明する。 一般的に起こりうる危険な状態の具体例を示す。(例：校内に迷い込んだ犬がいたとして、それが健常犬であるか病気を持った犬かわからない場合に起こりうる危険性など) ドリルについて説明/実行するときは「安全」という言葉を使う。(例：「ゲットアウト安全ドリル」というように安全と言う言葉を使って避難を説明) 安全訓練において起こりうる変則的な大人の指示に従う練習(例えば、美術の時間の場合には児童がすぐに扉の前に整列する)を行う。 安全訓練の際に「ゲットアウト—逃げる」、「ハイドアウト—隠れる」のドリルを行う。
育成レベル	小学校下級生	<ul style="list-style-type: none"> 「危険」に対する理解をなお一層深める。 何が危険であるか、危険ではないかを判断するには、大人の指導を必要とする。 潜在性のある危険と実際に起こる危険を区別することが困難であり、現実と空想を区別するのが難しい場合がある。 理解できる言葉 <ul style="list-style-type: none"> 「ゲットアウト—逃げる」 「ハイドアウト—隠れる」 「キープアウト—侵入を防ぐ」 	<ul style="list-style-type: none"> 緊急時には大人の管理と指示が必要。 基本的な安全指導/指示に従うことができる。 緊急時において簡単な安全確保のための作業をサポートすることができる。(例えば、大人の指示に従って照明を消し、ブラインドを閉じるなど) 	<ul style="list-style-type: none"> 学校を安全に保つために教師と学校のスタッフが常に従事していることを説明する。 大人が対応する一般的な危険の具体例を提示する。 ドリルについて説明/実行するときは「安全」という言葉を使用する。 安全訓練の中において変則的な大人の指示に従う練習を行う。 安全訓練の際に「ゲットアウト—逃げる」、「ハイドアウト—隠れる」のドリルを行う。

実践レベル	小学校上級生	<ul style="list-style-type: none"> •何が危険であるか、危険ではないかを判断するには、大人の指導を限定的に必要とする。 •潜在性のある危険と実際に起こりうる危険とを区別することが困難な児童もありうる。 •なぜ学校において安全訓練が行われているのか理解できる。 •すべての安全に関する指示と指導を理解できる。 	<ul style="list-style-type: none"> •緊急時には大人の指示が必要。 •すべての安全に関する指示と指導に従うことができる。 •緊急時（例えば、大人の指示に従って照明を消したり、ブラインドやドアを閉めたり、家具を移動したり、ドアの前にバリケードを作ったり、警察及び消防署通報など）、多くの安全作業をサポートすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> •学校を安全に保つために教師と学校のスタッフが常に従事していることを説明する。 •大人が対応する一般的な危険の具体例を提示する。 •潜在性のある危険と一般的な危険の違いを教える。 •ドリルについて説明/実行するときには「安全」という言葉を使用。 •安全訓練「ゲットアウトー逃げる」、「ハイドアウトー隠れる」、「キープアウトー侵入を防ぐ」を実施する。
熟練レベル	中学生	<ul style="list-style-type: none"> •実践レベルにおける知識をすべて理解している。 •潜在性のある危険と実際に起こりうる危険とを区別することができる。 •学校安全訓練がなぜ行われるのか理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> •大人の指示にしたがうこともできるが危険の際に自ら判断をして行動を起こすことができる。 •緊急時のほとんどの安全作業をサポートすることができる。 •侵入者の行動を妨害することもできる。 	<ul style="list-style-type: none"> •学校の安全対策に必要とされることについてのディスカッションができる。 •学校の安全対応の際に取り組むべき一般的な危険の例を、生徒自身が提示できるようにする。(潜在性のある危険と実際に起こる危険の違いを理解しているか確認) •ドリルについて説明/実行するときには「安全」という言葉を使用。 •避難およびロックダウンの安全訓練を実施する。 •示唆されている場合は、オプションベースの安全訓練（例えば、ロックダウン、バリケード、避難、または応戦/遭遇のオプションが考慮されたドリル）を実施する。
自分で考え実行に移せるレベル	高校生、大人の学生、一般のボランティアレベル	<ul style="list-style-type: none"> •熟練レベルにおける知識をすべて理解している。 •さまざまな緊急時の安全対策を理解し臨機応変に対応することができる。(例えば避難とロックダウンのどちらが必要か見極めるなど) 	<ul style="list-style-type: none"> •大人の指示にしたがうこともできるが危険の際に自ら判断をして行動を起こすことができる。 •学校が直面する可能性のある危険を見極めることができる。 •学校の安全計画の作成にかかわることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> •学校の安全対策に必要とされることについてのディスカッションができる。 •それぞれの学校に見合った特定の安全手順に関するディスカッションができる。 •ドリルについて説明/実行するときには「安全」という言葉を使用する。

			<ul style="list-style-type: none"> •さまざまな危険に適切に対応できる。 •緊急時におけるすべての安全作業をサポートすることができる。 •侵入者の行動を妨害できる可能性もある。 	<ul style="list-style-type: none"> •避難およびロックダウンの安全訓練を実施する。 •示唆されている場合は、オプションベースの安全訓練を実施する。
より一層高度な知識と認識を持っているレベル	安全訓練を受けた教職員－学校安全担当	<ul style="list-style-type: none"> •自分で考え実行に移せるレベルにおける知識をすべて理解している。 •勤務している学校が直面する可能性のある危険について、認識している。 •学校の緊急時の安全対策に関する知識をすべて網羅している。 	<ul style="list-style-type: none"> •学校が直面する可能性のある危険を特定できる。 •学校の安全計画の作成にかかわることができる。 •緊急時に、児童/生徒/学生が安全に行動出来るように指示し、他者を誘導できる。 •緊急時に自分で意思決定ができる。 •救急訓練と経験がある。 •侵入者の行動を妨害できる可能性もある。 	<ul style="list-style-type: none"> •それぞれの学校における独自の危険性を見極めて把握する。 •学校独自の安全計画に関するディスカッションに参加する。 •脅威評価データから、独自の学校安全計画を作成する。 •学校独自の安全対応に関する上級トレーニングに従事する。 •救急訓練に従事する。 •学校独自の安全計画（避難、ロックダウン、オプションベースの安全訓練の実施など）の管理指導の訓練をする。
専門家レベル	消防士、救命士及び学校内安全対策専門家	<ul style="list-style-type: none"> •「より一層高度な知識と認識を持っているレベル」における知識をすべて理解している。 •現場に精通し、細部において手抜かりのない反応と反撃についての知識がある。 	<ul style="list-style-type: none"> •緊急時のハイレベルな意思決定が可能。 •緊急時において自分と周りを守るために、現場に精通し細部において手抜かりのない反応と反撃ができるように装備と訓練がなされている。 •高度な救急医療を提供するための訓練を受けている。 •侵入者の行動を攪乱させる術を知っている。 	<ul style="list-style-type: none"> •学校に駐在している警察官の、非常に緊迫した状態下における潜在的な意思決定能力を評価するプロセスを決めておく。 •言い争いになったり、またその結果銃を使った脅威があるときのための特別な対処法の訓練を提供する。 <p>消防士・救命士は戦略的な救急法の訓練を受けるべきである。</p>

●「学校の防災・危機管理」マニュアルなどの作成、訓練については、一般社団法人 日本防災教育訓練センターにお問い合わせ下さい。

一般社団法人 日本防災教育訓練センター 代表理事 サニー カミヤ

<https://irescue.jp> メール : info@irescue.jp

電話: 03-6432-1171 携帯 : 090-4830-4888